

---

# バカと弓矢と召喚獣

ゴウセツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと弓矢と召喚獣

### 【Zコード】

N7671M

### 【作者名】

ゴウセツ

### 【あらすじ】

高校一年の春——主人公盾富優斗はハチャメチャでメチャクチヤな学園生活を迎えるのであった！！

「・・・おや？何だか不安しか感じないのでですが・・・」

「・・・あれ?僕の平穏は?」(前書き)

今作が作者の処女作となります、まだ機能をよく理解していない為、改正等が多くありますが暖かい日で見てやってください(ー?・?)

「・・・あれ？僕の平穡は？」

高校一年の春——僕は今、学校へと続く道を走っている。

道の両側には目を奪われてしまうような桜が咲き誇っている、しかしそれには目もくれず、全速力で走っている・・・もう頭の良い皆様にはお分かりだろう、そう、僕、盾宮 優斗はただいま

「一年の、しかも転校初日から遅刻は不味いですねーーー」

遅刻している

僕は今日から文月学園に転校する、この文月学園には「試験召喚システム」という物がある。これは科学とオカルトと偶然により完成した物で、テストの点数に応じた強さの『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムである。さらに「クラス」とに戦う試験召喚戦争という物もあるらしい。かくいうこの僕もその召喚獣に興味津々なのです。

・・・なぜこんな説明口調なのでしょう？

まあ良いです、とにかく学校に

「おい転人生、遅刻だぞ」

・・・入る前に呼び止められた、・・・先生でしょつか？

「あ、どうも、おはよう」「わこわく」

と頭を下げて挨拶をする、挨拶はちゃんとしませんとな。

「ふむ・・・礼儀正しいな・・・あいつひこ呼ばせたいもんだな」

「ふむ・・・最後のほうが聞こえませんでしたが・・・まあ良いでしょう。ん?最後のほうが聞こえませんでしたが・・・まあ良いでしょう。」

「じゃあ、失礼します」

「おい、待てクラスも解らずに行く気か?」

「はい?」

「ほれ、この封筒の中にクラス分けの紙が入っている、受けとれ」

「あ、ありがとうございます」

「こんなところでクラス分けを発表するなんて珍しいですね。

「・・・転人生、いきなりこんなことを言うのもなんだがな

「ん?なんだろ、しかし開けにくいですねこれ、上を破りますか。

「確かに一部のテストはできていた、だが一部のテストは壊滅的  
だった」

さてとクラスは・・・

「・・・これを書つのは心苦しげが・・・」

クラスは・・・

『盾宮優斗・・・ Fクラス』

「お前はバカだ

・・・はい?

「なんだしょ！」の廃屋は？」

謎の肌黒教師のバカ発言を乗り越え・・・初対面の人にバカにされると結構傷つきますね・・・現在、Fクラスに向かっています。

クラスはA～Fに分かれていてAが一番頭がよく、Fが一番頭が悪いとされている。

でも関係ありません、ゆっくりできる場所なら周りの評価なんて

→Fクラス前)

前言撤回、なんですかこの廃屋は！？

窓は割れ、クラスが書かれたプレートは割れ、机はちゃぶ台・・・ま、まあ住めば都としますし、見た目で毛嫌いするのもね、うん。

・・・よし、まずは中に入つて見よ、話はそれからです・・・。

「すいません、遅れてしまいました。」

「早く座れ、このウジ虫野郎」  
グサア！！

・・・え？何？いきなり暴言が聞こえたのですが？挨拶をしてすぐ  
に暴言つて・・・このクラスでやつて行く自信が一瞬で粉碎された  
んですが・・・

「ん？ ああ、すまん人違いだ」

・・・人違い？

「そ、そうですか人違いですか、次からは間違いないようにしてください」

「ああ、そうしよう」

なんだ人違いか、自信取り戻しました・・・で、ん？

「あの・・・あなた生徒ですよね？ どうして教壇に？」

「ん？ ああ、先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がつてみた」

「なるほど」

つてことはこの赤い髪の人はリーダー的存在つてことですよね。

「えーと席は・・・」

「自由だ、どうか適当に座つてくれ」

「あ、ありがとうございます」

なるほど自由・・・じゃあ奥の方に座つてと。

ふむ、時間があるみたいですし、本でも読んでいましょうか。

『すいません、ちょっと遅れちゃいました』

『早く座れ、このクソゴミ虫野郎』

・・・今入つて来たのが本来のターゲットですね、しかもパワーアップしています。

・・・なるほど、赤い髪の人は雄一と言つのですか、そして最高成績優秀者・・・あながち予測は外れていなかつたわけですね。

そしてクソゴミ虫野郎呼ばわりされた方の人は・・・バカそうだなうん。

『えーと、ちよつと通してもらひますかね?』

あ、先生らしき人が来ましたね、本をしまつてと。

「えー、おはようございます、一年F組担任の・・・福原慎です。よろしくお願ひします」

福原先生は名前を書いつとして、やめた。・・・チヨークすら無いのか・・・

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか?不備があれば申し出てください」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入つてないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」「う」

・・・「こは本当に教室なのですか？不安になります

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

恒例の自己紹介ですか、他の人のを聞いておかないと誰が誰だかわからなくなりますからね、きちんと聞いておかないと。

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

一見女子に見えるが、制服は男子用だし、名前も秀吉。どうみても男ですね。

「…………と、言つわけじや。今年一年間よろしく頼むぞい」

微笑みながら締めぐくる秀吉君・・・何人か頬を赤らめたが、秀吉君は男ですよー。

「・・・・土屋康太」

・・・・・・・・・・・・え？ 終わり？ 短すぎると思いますが・・・

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は

」

次は女子ですか、見たところ女子は彼女しかいないようですが、大丈夫か

「趣味は吉井明久を殴ることです」

大丈夫ですね。そしてまだ見ぬ吉井明久君かわいそうに

おや、次はクソゴミ虫野郎君ですか、本名は一体

「コホン。吉井明久です。」

・・・サンドバッグ君でしたか。

「気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

ダーリンって、そんなこと言つようなバカはさすがに

『ダアアーリィーーンーー』

バカばっかりです

言われた明久君も吐き氣をこらえていますね、無理もない。ん、僕の番ですね。

「皆さんはじめまして、転校生の盾宮優斗です。今日から一年間よ

ねじへお願ひします。」

「……こんな感じですかね。なるべく印象よくしてみましたが・  
・・・これから先、どうなるでしょう・

「馬鹿ばっかりですね、このクラスは」（前書き）

## バカテスト【第一問】

### 科学

問 以下の問いに答えなさい

『料理のために鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めるとき問題が発生した。この時の問題とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

### 姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると酸素と激しく反応する  
為危険であるという点  
合金の例・・・ジュラルミン』

### 教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのです  
が、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

### 土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

セレナ問題じゃありません。

吉井明久の答え

『会員の例・・・未来会員（すりへ強ニ）』

教師のコメント

すりへ強こと言われても。

盾富優斗の答え

『会員の例・・・オリハルコン』

教師のコメント

せめて実在するものにしてください。

「馬鹿ばっかりですね、」のクラスは

「あの、遅れて、すこま、せん・・・

『えつ?』

ピンク色の髪をした女の子が入ってきましたが・・・女子がこのクラスに来るのがそんなにおかしいのでしょうか?

「丁度良かったです。今日紹介をしてくるといいなので姫路さんもお願いします」

「は、はーーーあの、姫路瑞希とこーます。よろしくお願ひします・・・

・

なるほど、姫路さんか。

「はーーー質問ですーーー」

「あ、はー、はー。なんですか?」

「なんですか?」

・・・質問の意味がわかりません、といつか、どう聞いてもイジメのようにしか聞こえませんが・・・

「や、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまって・・・

『ああ、なるほど』

・・・なるほど、姫路さんはFクラスに来るのがおかしいレベルの秀才なのに熱のせいでテストを受けられず、Fクラスになってしまった。それならば先ほどの質問も意味がわかりますね。他の誰さんも何か理由が

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

純粹なバカばつかりですね。・・・おや、姫路さんが近くに座りま  
すね、挨拶くらいはしておきましょうか。

「き、緊張しましたあ～・・・」

「あのや、姫

「姫路（さちの）」

おや、吉井君を遮つてしまつた上に雄一君とかぶつてしまつました  
ね。

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む。」

「転校してきた、盾宮優斗です。よろしくお願ひしますね。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

「…遮られた吉井君が負のオーラを漂わせているのですが…何か計画を狂わされでもしたのでしょうか？」

「そう言えば…先ほど高熱を出したと言つていましたが、体のほうは大丈夫なのでですか？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君！？」

「ん？名前を知つている…彼らは知り合いなのでしょうか？」

「姫路。明久がブサイクですまん」

「坂本君、ブサイクは言い過ぎですよ。確かに面白い顔ですが…」

「二人とも…！フォローになつてないよ！？」

「そ、そうですよ…それに吉井君は、目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクや面白い顔なんかじゃないですよ！その、むしろ…」

「…今の反応からして…姫路さんは吉井君の事が好きなのでしょうか？…・・・フフフ、面白そうですね。」

「そう言わると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしないな。俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいたような気

もするし」

「おや、そんな物好きが居るのでしょ、つか？」

「盾富君、初対面なにこひつきから酷くないーー？」

「そ、それって誰ですかーー？」

「確か久保 利光だったかな」

利光 限り無く男性につけられる名前 おそれく （性別／オス）

「・・・・・・・・・・・・」

「吉井君、現実を受け止めなさい」

「そうだと明久。声を殺してさめやめと泣くな

「・・・坂本君、結構気が合いますね」

「ああ、そうだな、仲良くなつていけそうだな」

「「主に明久（吉井君）こじりで」」

「二人とも酷すきなのよーーー」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「「あ、すいませー」」

バキイツ バラバラバラ・・・

・・・軽く叩いただけで崩れ落ちる教卓つて・・・」の環境はど  
れ程劣悪なのでしょうか?

「えへ・・・替えを用意してきます。少し待つていてください」

「「あ、あはは・・・」

もう乾いた笑いをするしかありませんね・・・

・・・おや?あの一人が廊下に出ていきますね。何か話でもあるの  
でしょうか?・・・ところで。

『実は前日、両親の葬式があつて』  
『昨日遊びに行つたときピンピンしてたじやねえか』  
『登校中トラックに引かれかけて』  
『かけたなら無傷だろうが』  
『ゲームやってたよ、悪いか!』  
『悪いわ!』

いつまで彼らは自分がバカだと証明し続けるのでしょうか?・・・?

先生が戻つて来て、自己紹介の続きをよつと書いてから10分  
位立ちましたが・・・特筆すべきような事はありませんでしたね。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

・・・おや、雰囲気が違いますね・・・何かするつもりでしょうか?

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ・・・さて、皆に一つ聞きたい」

うまく間合いをとり、目を引き付ける。そして引き付けたことを確認したら彼の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭く、廃屋のような教室。

綿がろくに入つていなく、古く汚れた座布団。

薄汚れて今にも壊れそうな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシート、ノートパソコン、エアコンが各個人に配布されているらしいが、一不満は無いか?」

『大ありじやあつー!』

確かに差がありすぎると思いますが・・・。

「そこでだ、これは代表としての提案だが

「

なるほど、彼の狙いはこれでしたか。

「う  
FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
さて、楽しくなりそうですね。

「観察処分者?何ですかそれは?」

「Aクラスへ戦争をしかける・・・転校してきたばかりで戦力差がどれほどかはわかりかねますが、それでも最低レベルのFクラスが最高レベルのAクラスに挑むのはかなり無茶な気がしますね・・・」

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

ほかの皆さんも無茶だと・・・って最後の人なにカミングアウトしているんですか。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ?』

『何の根拠があつてそんなことを』

同感です、せめて根拠くらいは示していただかないと。

「根拠ならあるわ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろつている。それを今から説明してやる・・・おい康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いていいで前に来い」

「・・・!」(ブンブン)

「は、はわつ」

・・・何をやつているのでしょつか彼は・・・といつか皆に犯行現場を叩撃されているのにあそこまで必死に否定するなんて・・・ある意味すごいですね。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性職者だ<sup>ムツツリー</sup>」

「・・・・・・！」（ブンブン）

・・・むつツリーに？

『ムツツリー二だと・・・・・』

『馬鹿な、ヤツがそうだといふのか・・・・？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・・』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・・』

・・・ムツツリー二つて・・・・・いつたい・・・・。

「？？？」

あ・・・・姫路さんもわからないみたいですね・・・・ほんとにムツツリー二つてなんなんでしょう？

「姫路のことは説明する必要もないだろ？。既だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

「えつ？わ、私ですか？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつだ』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

誰でしょう、先ほどから変なことを言つてている人は。

「木下秀吉だつている」

『おお・・・・!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

ふむ・・・情報が集まりませんね・・・しかし、名の知られている人物なのでしょうね、彼は。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやつてくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかつたか?』

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だつたのか』

『実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな!』

なるほど、名の知られている人物を使って士気の上昇を謀りましたか。ではこの高まつた士気を戦争まで維持して――

「それに、吉井明久だつている」

・・・シン――

なに思いつきり士氣下げているんですか。

「ちょっと雄二ー・じうじーで僕の名前を呼ぶのさー・まつたくそ  
んな必要はないよね！」

「そうですよ、いくらオチをつけるためとはい、肩書きも何もな  
い人の名前を呼んで士氣を落とさなくとも」

「いや、こいつも肩書きくらいならあるぞ」「ちょっと優二」こいつ  
の肩書きは『観察処分者』だ

「『観察処分者』？ 何なんですかそれは？」

「あ、それ私も気になります」

「知らないなら教えてあげるよ盾富くん、姫路さん。『観察処分者』  
って言うのはちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「バカの代名詞だ」

「バカ雄二！ せつかくの僕のフォローを無駄にするなー！」

「フォローは他人にするものですよ吉井君」

「・・・・・」

「バカだな」

「バカじやの」

「・・・バカ」

「嘘してひどいっ！..」

「話がそれたな。観察処分者はな、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚中でこなすといった具合だ」

「そなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣つて見た目と違つて力持ちつて聞きましたから、そんなことができるなら便利ですね」

「しかし・・・それだと処分にならないのでは？強制雑用の分を差し引いても、メリットが大きすぎるのでは・・・」

「ああ、もちろんまだデメリットは存在する。まず試験召喚獣は教師の監視下でないと呼び出せない、よつて雑用以外にその力が発揮されることは少ない、さらに試験召喚獣が受けた疲労や痛みの何割かが明久に返つてくるんだ」

「なるほど、つまりただでさえ点数が低いのに（グサツ）召喚獣がやられると痛みが返つてくるためろくに使い物にならない（グサグサツ）凄い役立たずの肩書きとこいつですね（グサグサグサツ）」

「そうじうじうじだ・・・ん？おい明久、なに教室の隅で縮こまつているんだ？」

「うん・・・なんでもないよ・・・」

「まあいい、とりあえず俺たちの力の証明として、まずはロクラス

「思ひよつてみよつて征服してみよつて」

• • • • • • • •

・・・ ねえハセヤツアモリおしたかね ・・・

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員  
筆を執れ！出陣の準備だ！」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステム、テスク  
だ！」

一  
お、  
おー<sup>・</sup>  
・  
・  
」

す、す、レーテンションですね・・・

「よし、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらつ。無事大役をはたせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目にあうよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。だまされた  
と思つていつてみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つてこる」

「ふつ、わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

そして吉井君はクラスメイトの歓声と拍手に送り出されていった・・・

「で？吉井君が酷い目にあつ確立は？」

「99・9%だ」

「ですよね」

「あれ? いつの間に?」

Side 明久

「騙されたあつ!」

「殺されるところだつた! Dクラスの連中、ものすごい勢いで掴みかかってきたぞ! 息を切らせて床にへたりこむ僕に雄一が視線を落とし、

「やはつそうきたか

平然と言い放つた。ブチ殺すぞ、ゴト。

「やはりつてなんだよ! やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじゃないか!」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか

「少しほ悪びれろよ!」

去年の春から付き合いがあるけど、いまだに雄一のことはよくわからぬ。

「吉井君、大丈夫ですか?」

「弓きぢがりれたんですか? 制服がボロボロじゃないですか?」

僕の有様を見て、盾宮君と姫路さんが駆け寄ってくれる。ああ、なんて優しいんだろう。ここは心配をかけないようにしてない。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどがかすり傷」

「一応見せてみてください。救急セットくらいは持ってきてありますから」

本当に優しいなあ盾宮君は、どつかの誰かさんとは大違いだ。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田さんまで来てくれた。体は痛いけど、こいつやって心配されるのも悪くないね。

「本当にかすり傷ばかりですね、しかし数が多いので絆創膏じゃ大変ですし・・・大げさに見えるかもせんが包帯でも巻いておきましょうか」

「うん、平氣みたいだね。心配してくれてありがとう」

「そう、良かつた・・・。うちが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

あわてて腕を押されて転げまわ「ああっ！急に動いたらー！」へ？

グルグルグルグル・・・

「え？あ、あれ？」

み、身動きがとれない！？

「まつたく、巻いつとした包帯に巻かれるとは・・・」

「まるでマラ男じやのつ」

「つてみてないで助けてよ一人とも！」

Side優斗

「ふう・・・やつと外し終えましたか・・・

「ああ・・・やつと自由になれた・・・」

「つたく、何やっているんだか。それより今から一ティングを行  
うぞ」

「おや？ほかの場所で行うのでしょうか？扉を開けて外に行つてしま  
いましたね。

「あの、痛かつたらいつてくださいね？」

「ふう・・・疲れたぞい」

と言つて姫路さんと秀吉君が外に出て行く。

「…………（カスサス）」

「ムッシローー！」覗いていたときの畳の跡なら消えてるよ~」

「…………（ブンブン）

「いえ、今頃否定しても……第一あの場面はクラスメイト全員が見ていましたよ~」

「…………（ブンブン）

「これだけバレているのに否定し続けるなんて、ある意味すごいこと思つ」

「…………（ブンブン）

「……何色だった？」

「水色」

即答ですか。

「……それ、覗いたって血出しこるようなものですよ」

「…………（ブンブン）

「どれだけ認めたくないんですか。

「ほら吉井。あんたも来るの」

「あー、はいはい」

「返事は一回ー。」

「へーー」

・・・ふう、僕はその間なにをーーー

「あれ？ 盾富は来ないの？」

・・・はい？

「あれ？ てつきり来るもんだと思つていたけど・・・

「あ、僕も」

「あの・・・行つてもいいんですか？」

「へーー？」

「いえ・・・友人関係でもないのに参加するのはほと・・・

「何いつてんのさ。もう友達じゃん」

「・・・はい？」

「え？ ちがうの？ 僕は友達だと思ったのになあ・・・ビリで間違つたんだろう？」

「え、あ、あの・・・」

「氣にかかる」とないわよ盾面、ここつまむつこつやつのよ

「・・・・・・(「クン)」

「・・・・・・」

「あれ?・・・」

「・・・フフッ、面白い人ですね

「え?なに?」

「いえ・・・何でもありませんよ明久君」

「あ、うん・・・って、今明久って」

「友達なら名前で呼ぶくらい当然ですよね?」

「へ?結局友達だったの?」

「まあ・・・そういうことにしてもおまじょう。それより早く行かないとみんなを待たせてしましますよ」

「そうね、はやくこきましょ」

「・・・・・・(「クン)」

「? ? ?」

転校して初めての友達が、いつの間にかできているなんて。幸運ですね。フフッ、

## 「食事はさりととつまじょ」（前書き）

### バカテスト 「第一問」

国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喻え』

姫路瑞希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。ほかにも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

盾森優斗の答え

『（1）猿を木から射落とす』

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

「食事はあちこちつまみよつ」

今僕らは、屋上に向かつて坑内を歩いている。（ちなみに、先に行つていた三人は僕が来たことをさも当たり前のようにはうに捕らえていたので、少し安心した。あと、秀吉君と雄一君に名前で呼んで良いと言われました）・・・つと、考え事をしているつむぎに屋上に着いたみたいですね。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼飯ついてことね？」

「やつなるな。明久、今日の昼くらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思つならパンでもおいつてくれる」と嬉しいんだけど

「えつ？ 吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べているよ」

・・・一応？

「・・・あれば食べているといえるのか？」

「どういふ意味ですか？ もしかしてカロリー〇イトみたいな簡易食料だけで済ましているんじゃ・・・」

「いや、ほんとに食つてな——水と塩なんだ

予想外でした。

「失礼な、ちゃんと砂糖だつて食べていろやー。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるひとまではませんよ・・・。

」

「舐める、が表現としては正解じゃねりつな。」

「とこづか、よく生きていましたね・・・。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな

「それは自業自得といづか・・・何といづか・・・。

「し、仕送りが少ないんだよー。」

「・・・あの、良かつたら私がお弁当作つてきましょうか?」

「え?」

「吉井君、その文字は現代で使われていませんよ

「ほ、本当にいいの?」

「はい。明日のお皿でよければ

「やつたあー僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ

「！」

「……いつ死んでもおかしくないような生活していますね……」  
「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけ《》・《》に  
作つてくるなんて」

「あや、この棘のある方に……なるほど、彼女も吉井君のことを  
が……」

「あ、いえ！ その……皆さんとも……」  
「俺たちにも？ いいのか？」

「はい。いやじゃなつたら

「それは楽しみじゃの！」

「……お手並み拝見ね」

「あらがとうござまく、姫路さん」

「今だから言ひたがい、僕、始めて会つ前から君の事好き———」

「吉井君、いろんなところでも、成功率は〇%ですよ」

「やして今振られると弁護の話はなくなるぞ」

よし、これでムードや面白わの告白を阻止できましたね。後は吉井君がなんと言つて」まかすか——

「……にしたいと思つていました」

何言つているんですか、そして何やりきつたような顔をしているんですか。

「明久。それではよく場つをカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

「なぜその言葉を選んでしまつたんですか、明久君……」

「明久。お前はたまに俺の創造を超えた人間になる時があるな」

「だつて……お弁当が……」

どれだけ食に困つているんですか。

「さて、話しがかなり逸れたな。試召戦争に戻りつ」

あ、忘れてましたね。

「雄一。一つ気になつていたんじやが、どうしてロクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろひ、勝負に出るならAクラスじやろ？」

「確かに……一クラス上といつのは、少しきつこものがあるので  
は……」

「まあ、当然考へがあつてのことだ」

「ほう・・・たとえば？」

「いろいろ考へはあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりクラスは上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかも知れない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えと・・・美少女一人と馬鹿が一人と常識人が一人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「失礼な、少なくともあなたよりは頭がいいですよ！？」

「優斗まで！？ しかもさりげなく馬鹿にされた！？」

「・・・（ポツ）」

「ムツツリーまで！？ どうしよう僕だけじゃツツリ！？ きれない！」

「まあまあ。落ち着くのじや、代表に優斗にムツツリー！」

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱す」と対してツツコミを入れたいんだけど」

「ま、要するにだ。姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかとやり合つても意味がないってことだ」

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ、確実に勝てるとはいえないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ

「いえ、それだと僕が困るんですよ」

「へ? どうしていきなりAクラスに挑むと優斗が困るのさ?」

「まだ僕は召喚獣の操作に慣れていない、すぐにAクラスに挑んだら足手まといになるんですよ」

「ああ、なるほど」

「全体を通して見れば・・・まず初陣の景氣づけ、僕と同じようにほかの人たちにも召喚獣の操作に慣れさせるため、そして姫路さんがFクラスにいることが知れていないことを利用した奇襲で勝つことができるのがDクラスだった、とまあこんなところですかね」

「・・・もしかして優斗って頭いい?」

「「ハーフ」」とが得意なだけですよ、あつていますか雄二君？」

「あ、ああ。ほんとだな、他にも打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスでもあるがな」

「なるほど・・・と「ハーフ」」とは施設や友人関係を利用してAクラスと対等に戦う・・・としたところですか？」

「まあな。まあ、後でのお楽しみつてやつだ」

「あ、あのー」

「ん? ハーフした姫路」

「えっと、その。やつを言いかけた、つて・・・吉井君と坂本君は、前から試合戦争について話し合っていたんですねか?」

「ああ、それか。それはつこさつき、姫路のためにつて明久に相談されて——」

「それはやうどー。」

「ふつむ・・・やべきつてしましましたか、面白い話が聞こえるかと思いましたのに・・・残念ですね・・・

「せつしきの話、ロクラスに勝てなかつたら意味がないよ

「負けるわけないぞ」

「・・・根拠は？」

「根拠？簡単だ。ウチのクラスは――最強だ」

・・・根拠になつていませんね・・・ですが。

「いいわね。面白ひいじゃない？」

「もうじやな。Aクラスのやつらを引きずつ落としてやるかの

「・・・・・・(べつ)」

「が、頑張ります」

士気を高めるに上策・・・と言つたところでしょうか。

「さうか。それじゃ、作戦を説明しよう

さて・・・腕が鳴りますね。

「「これが僕の召喚獣ですか・・・」

「はあ・・・初陣が前線とは・・・少し<sup>おっくつ</sup>億劫になりますね・・・」

「まあまあ、気にするでない」

現在、僕と秀吉君率いる前線部隊20名が廊下を進軍している。

「けど、ようやく僕の召喚獣の装備がわかりますね」

「ん?なんじや、知らんかったのか?」

「ええ。」の学校に来たのは編入テスト以来ですからね

「ふむ、それは楽しみじゃ――」

「いたぞ!――Fクラスだ!――」

「――と、見つかってしまったみたいじゃな

「そうみたいですね」

「いぐぞ!――Fクラスのバカビモ!」

『<sup>サモン</sup>試験召喚つ!』

呼び声に応じてFクラスの人たちの足元に魔方陣が現れ、そこから召喚獣が姿を見せる。

「うわ、もうこっちじゃー、召喚…」

『召喚…』

今度は「うわに魔方陣が現れ、召喚獣が飛び出す。

そして現れた召喚獣たちが戦い始めた。

「おつやあー」

「へへ」

「へりへー」

「ぐはあー」

「なるほど、これが試験召喚戦争ですか

「つい、見てないで早く参加するのじゃ優斗ー」

「わかつてになりますよ・・・コホン、それでは——召喚…

そう言ったとたんに足元に魔方陣が現れる。そこから——左手に木でできたような「」を持ち、腰に矢筒をぶら下げ、動きやすそうな服装に身を包み、両手にゴーグルを装着した、僕の姿をデフォルメしたような召喚獣が現れる。

「へえ、僕の召喚獣は使いですか。ではさっそく・・・む

「どうしたんじゃー?早くせーー!」

「いえ、今『』を放つたら味方に当たるで……」

そう、現在乱戦中なので、敵も味方も入り乱れて戦っている。下手に『』を放つたら味方に当たってしまうのだ。

「では、やくたたずではないか！」

「そうみたいですね……ビシビシショット？」

「ワシに聞くな！」

『なんだあいつ？』

『転校生みたいだな、見たことがない』  
『まずあいつからやつちまえ！』

おや、乱戦を外れて『』たちが『』が来てますね……では。

「ゆ、優斗だいじょう『ヒュンヒュンヒュン…ドスドスドス…』  
ぶ・・・？」

『Dクラス生徒×3 VS 盾宮優斗

総合科目 0点 VS 2013点』

「言い忘れてましたが……『』は得意なんですよ」

『ば、バカな……』

「戦死者は補習だ！」

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだつ！』

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれる気がしない！』

『嫌だ！死にたくないーーー！』

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやる！」

『『『お、鬼だ！誰か、助けつーーイヤアアーー（バタン、ガチャ）』』』

・・・なるほど、一つ分かつたことがあります。

「あの先生の名前は鉄人と言つのですか・・・」

「優斗、それはあだ名じや、そしてつれていかれたやつらにはノーノメントかの？」

ノーノメントでお願いします。

Side 明久

・・・ふむふむ、今の声を聞いて試召戦争の雰囲気はだいたいわか

つた。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？ 作戦？ 何で伝えんの？」

「總員退避、と」

「「」の意氣地なし！」

そしてチョキで田を殴られた・・・つて。

「目が、目があつ！」

「田を覚ましなさい、この馬鹿！ アンタは部隊長でしょ？ 憽病風に吹かれでじつするのよ！」

その覚ますべき田に激痛があつ！

「い、吉井？ うちらの役割は木下と盾宮の前線部隊の援護でしょう？ アイシラが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイシラは補給ができないじゃない」

島田さん、君はなんて男らしいんだ！ なぜだか涙が止まらないよ！

（あと激痛も）

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけれど、これは戦争なんだから多数対一で戦えば良いのよ」

「そうだね。よし、やるぞー。」

「うん。その意気よ、吉井！」

と意気込んでいると、報告係がやつてきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞー。」

「総員退避よ」

わざと言葉が全然違つて

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「よし、逃げよつ。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

ぐるっとFクラスへ方向転か——

「あ、あと盾宮部隊長からの伝言が

「伝言？悪いけど僕らは前線には行けないと——」

「えー『逃げたりしたら末代まで呪い続けますから覚悟してくださいね』と

「全員突撃しろおーつー。」

気が付いたら戦場に向かつて全力ダッシュしていった。それもこれも、友達を思つてのこと。やっぱり友達って大切だよね！と、前方から「」に向かつてくる美少女を発見！

「明久、援護に来てくれたんじゃな！」

ああなんだ。秀吉じゃないか。なんていうかいつ見ても可愛い・・・

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。点数もある程度は残つておるわい」

「せうなの？・・・ってあれ？優斗は？」

「優斗ならまだ前線じゃ、点数がある程度残つておる者たちと戦つておる」

なんだつて！このまま僕らが行くのが遅くなつて優斗がもしやられてしまつたら・・・

「末代まで呪い続けられる！」

「・・・なんなんじゃそれは？」

「気にしなくていいわ木下。それよりも早くテストを受け直してきたら？」

「そうじやな。ではあとは頼むぞ明久」

「わかつた。それじやあね秀吉」

秀吉を見送ったあと、僕らは急いで優斗のいる前線へ向かった。も、もちろん友情のためだよ！決して呪われたくないから急いでいるわけではないからね！（汗）

「あれ？ あそこで戦っているのって盾宮じゃない？」

島田さんの指差した方を見ると、確かに三体の召喚獣に包囲された優斗が・・・って。

「 ゆ、 優斗！ ？ 大丈夫！ ？」

「ん？ ・・・ ああ、 明久君と島田さんじゃないですか。 もう中堅部隊との合流時間ですか？」

「 もうただけど。 つていつてる場合じゃない！ 今すぐ加勢するよ。 」

「 その必要はありませんよ。 たった今 ―― 」

『 サダメサダメサッ！ 』

「 ―― 終わったとこだよ 」

『 Fクラス 盾宮優斗 VS Dクラス男子 × 3

総合教科 938点 VS 0点

「 ・・・ は？」

「 いやあ、 皆さんお強いですね。 2000点ほどあったのにこいつが

で減らされてしまいました』

『、2000点…？それってどう考へてもFクラスの点数じゃ無いよね…？

『バカな…・何者なんだあいつ』

『ふざけるな！こつちはもう10人も殺られているんだぞ…』

『俺、この戦いが終わったら告白じにいくんだ…』

最後の人ー、死亡フラグ立つてるよー

『前線部隊ー中堅部隊と交代します！今すぐ撤退を開始してください…』

『了解！』

『あとは頼みましたよ…・って。明久君、なにボーッとしているんですか？』

『あ、『めん』めん。ちょっと考え方してて』

『…まあいいでしょ、さて僕は点数の補給があるからこれで失礼します。あとは頼みましたよ』

『わかったー！』は任せでよー』

『では

タツタツタツ…・・・

優斗も頑張っていたみたいだし、僕も頑張らないと！

「戦争には犠牲がつきものである（今回は明久君）」（前書き）

### バカテスト 「第三問」

英語

問 以下の英文を訳しなさい

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
y」

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのは *she is*だけですか。

吉井明久の答え

「 \* × 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

盾富優斗の答え

「私は今朝、兄にラリアットを叩きつけてから登校しました」

教師のコメント

何をどう訳したらいい文になるのでしょうか。

「戦争には犠牲がつゝものである（今回明久君）」

「それで先程の放送はいったいなんだつたんですか雄一君」

「前線拡大阻止の作戦だ」

現在廊下を進軍中の僕らの話題に上がっている放送とは、先程僕がテストを受けている時に流されたもので『船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』といったものだ・・・これはすぐにデマだとわかりそうな事ではないでしょうか。

「船越先生とはいつたい・・・?」

「数学の教師でな、婚期を逃して、生徒に単位を盾に交際を迫るような先生だ。おそらく戦争終了までも待ち続けるからな。前線を広げられなくて済む。」

「なるほど・・・となるとその指示をだしたのは・・・やつぱり?」

「ああ、俺だ」

「・・・まあ、雄一君のことです。普通の作戦は出さないと思いましたが・・・」

「なんだ?不満か?」

「ええ、あの放送を聞いた時の明久君の絶望した顔が見れなかつたのが悔しくて・・・」

「・・・優斗もなかなかに鬼畜じやの。」

「・・・（「ク」「ク）」

「面白いものを見たいと思うのは人の性さが・・・仕方がないじゃないですか」

「いや、絶望した顔を面白おもしろいものと言こられるのがどうかと思つた  
じやが・・・」

「フフッ・・・おや、前線部隊が見えてきましたよ」

「む、本当じやの」

「・・・結構殺られていますね、あと5、6人しかいない」

「ヤバいな・・・明久、あと少し持ちこたえろー。」

「・・・・・急ぐぞ」

先程酷い事を言つたような気がしましたが、友人を見殺しにするわけにもいきませんしね。とりあえず急いで合流しましょう。

『Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を――あがあつ  
ー。』

つて何をやつているんですか！助けにいくのがバカらしくなるようなことをしないでください！

『「Jの部隊長はバカだ！俺一人で十分だから、皆は残りを！』

ヤバイですね。気付かれました（吉井君がバカだということが）

『くたばれ吉井！』

『わうはいくかつ』

ヒヨイツ

ガツ

ドサア！

『なつ！？』

・・・うまいですね・・・回避と同時に足払いとは・・・しかし他の召喚獣に比べて動きが良いような気が・・・

『ああつ！霧島さんのスカートが捲れているつー』

『なにいつ！？』

霧島さん？また新しい名前ですか。しかし戦争中だというのにこんな嘘に敵も味方も引っ掛からせるとは、かなり有名な女性のようですね。

・・・ムツツリー二君、スピードが上昇していますよ。そんなに気になるんですか？あと雄一君、なぜスピードダウンしたんですか？急ぎますよ？・・・あれ？明久君？何で上履きを手に持っているん

ですか？  
ガシャアーン！

つてなぜ勢い良く窓ガラス割つているんですか！

『な、なんだ！？なに！？』

『うわっ！島田さん！そんな物をぶつかる飯だよ！』

つて今度は消火器！？

ブシャアアツ！

『島田さん、キリはなんてことを…』

島田さんに墨をなすり付けよつとしていませんか！？

『Fクラスの島田め！何て卑怯なやつなんだ！』

『許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな  
ー！』

『やうだー！在学中には彼氏のできない状況にしてやるー！』

・・・島田さんあなたの居ないとひるど悪評が広まつてますよ。

ガスツ！

シユワアアアーー

今度はスプリングラー・・・器物破損で訴えられてもおかしくない

ですね・・・

・・・近くまで来ましたし、とつあえず援護しますかね。

「待たせましたね、吉井君。さてと・・・召喚・・・」

「あー優斗ー！」

「へんつ、じやまするなー」

「いやですよ。そして・・・（ヒュンー・ドスツー）・・・終わりです」

『Dクラス 中野健太 VS Fクラス 盾富優斗  
科学 0点 VS 371点』

『「・・・はあ！？」』

「・・・あれ？何かおかしかったですか？」

「いやだつてその点数！」

「点数が何か？」

「明らかにAクラスレベルじゃぞーー？」

「へえ～そつなんですか

「な、なんだあいつ！」

「あの召喚獣・・・間違いない！前線部隊の言つていた呪使いだ！」

「バカな！あの中野が一撃で・・・！」

「おひど。そう簡単には逃がしませんよ。」

『げつ！あいつ適当に射つてきやがった！』

『来るな！来るなあ！』

・・・やつ過ぎましたかねえ。

「追いますか？」

「深追いはするな。俺たちも一旦戻るぞ」

「優斗。あんな点数なのにどうしてFクラスなの?」

「科学は得意なだけですよ。それにひとつと良くできましたしね。  
苦手科目だと全然点をとれませんしよ」

「へえ」

さてと、そろそろ決着をつけますか。

「いつせんなものを調達したのですか？」

Side 明久

教室に戻り、科学のテストを受け直した後、

「明久、良くなつた」

「本当に良くなつましたね明久君」

と、総大将である雄一と、友達である優斗が褒めてきた。

優斗の素直に褒めてくれているんだろうけど、こいつは……

「……校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッヂリナ」

やつぱり！ 僕の不幸を喜んでやがる……けど今肅清をくわえるべき相手は……

「雄一、須川君がどこにいるか知らない？」

僕が今最も逢いたい彼の所在を確かめる。どこかに隠れているのか？

「もうすぐ戻つてくれるんじゃないかな？」

おおつーもうすぐ戻つてくれるんだ！ よし、大丈夫、包丁は家

「庭科室からパクってきたし、靴下には砂も詰めた。

「やれる、僕なら殺れる……」

「吉井君、殺人は犯罪ですよ」

優斗が何か言つてゐるが後回しだ。

「ちなみに……」

今のは最優先事項は——

「あの放送、雄二君の指示ですよ」

「雄二だああつ！」

「シャアアアアツ！」

よし、殺つ

「あ、船越先生」

「ちいっ！撤退だ！」

急いで掃除用具入れに飛び込む。

「……危機回避能力は高いみたいですね」

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけるか

「そうじやな。ちいさらと下校している生徒の姿も見え始めたし、

頃合にじゅりつ

「・・・・・（「ク」）」

「おっしゃーロクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おつひー』

教室から皆が出て行く気配がする。くそつ！雄一が逃げてしまつ！

「明久君」

ん？優斗？

「船越先生なら来てこませよ、安心して出てきてくださいね」

足音が響き、教室に人の気配は完全になくなつた。

- へ？

Side 優斗

さて、明久君の誤解も解き、戦闘にも追い付けた。あとは・・・

「お前弓使いだな！」

「厄介だが俺たちなら倒せる！」

「さつきはよくもやつてくれたなー！」

「個々で会つたが百年目・・・」

「正々堂々と勝負だ！」

「お前弓使いだな！」

「・・・5V51のどじが正々堂々なのですか・・・」

「の人たちを倒すことですね。」

「つるせじーーこれは戦争だ！」

「そりだー！勝てばいいんだ！」

「勝者こそ正義だ！」

「後で後悔するなよー！」

「フルボッコにしてやるよー！」

何故でしょー。無性に疲れるのですが・・・。

「はあ・・・で?科目は何ですか?」

「数学で勝負だ！」

「悪いが、確実に勝たせてもらひー！」

「数学は得意なんでな！」

「Aクラスレベルなんてテーマだろうしなー！」

「Dクラスの数学5人組と呼ばれたかつた俺たちが相手だー！」

「つて呼ばれてないんじやないですか」

それに数学は・・・

「つ、つるせじーー召喚ーー！」

「「「「「召喚ーー」」」

「ふう、では。召喚ーー！」

『Dクラス男子×5 VS Fクラス 盾宮優斗  
1217点 VS 617点』

得意分野なんですよ。

「なんなんだ」の点数は！？

「うひたえるな！合計なら二つの方『えこひ』（デシュウチ）  
ああっ！俺の召喚獣がっ！」

「山畠…」

「へそつ…へりえ…」

ヒヨイツ

「おつと」

「はつ。近接だとなにもできねえじゃねえか」

「いまだ！突撃！」

「オリヤアア！」

「へりえええ…！」

「…確かに近接は厄介ですね…」

「…確かに近接は厄介ですね…あ  
べりしまじょうか…」

「』でなくともいいんでしたね、戦えれば

とつあえず来た敵を

蹴り飛ばします。

「んなつー。」

「おや。後ろの召喚獣にもあたってくれましたか。良い的ですよつー。」

ヒュン！グサグサツ！

『Fクラス男子 × 5 - 3 VS Dクラス 盾宮優斗  
531点 VS 615点』

「「俺の召喚獣があつー。」」

「バカなー西畠と福畠までもやられるなんてー。」

「チクシヨウ！仇は俺たちがとつてやるー。」

「竹畠・・・・雨畠・・・・」

「・・・・烟集団・・・」

「「「「「その名称で呼ぶなあー。」」」

（気にしてたんですね・・・・すいません。）

「だがどうする？奴にお前らだけで勝てるのか？」

「確かに厳しいな・・・」

「どうすれば・・・」

『援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないよう周囲を見て動け！』

「おお！本隊だ！」

「これなら勝てる！」

「いける・・・いけるだ！」

「奴に制裁を下せるんだ！」

「天は我らを見放さなかつた！」

「よし行くぞー！」使「あのー」なんだー！」

「もう終わつてますよ」

「は？」

『Fクラス烟集団　VS　盾宮優斗

0点　VS　613点

「なにいー。いつの間にー。」

「Dクラスの本隊の方を見ていろとき】・・・

「不意討ちとは卑怯な！」

「5VS1よりましだと思うのですが・・・」

「戦死者は補習だ！」

「て、鉄人！」

「どつから出てきやがった！』

あ、同感です。

「調子に乗るなよ盾宮！ いづれ第一、第三の 番が・・・

「ど」の魔王ですかあなたたちは、あとすでに第一から第五まで出でますよ』

「さあ行くぞお前たち」

「 「 「 「 「嫌だあああーーー！」 」 」 」

「・・・一人で5人を引きずつていくなんて・・・どんな腕力ですか・・・」

軽く恐怖すら覚えます。

「さて、本隊を叩きますか

」

『Dクラス代表、平賀源一討死！』

「 ね？」

あれ？もう終わりですか？

「言い訳はよく考えてから言こましょひ」（前書き）

## バカテスト 「第四問」

### 数学

問 以下の間に答えなさい。

『（1） $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい』

『（2） $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、？』

？の中から選びなさい。

？  $\sin A + \cos B$

？  $\sin A - \cos B$

？  $\sin A \cos B$

？  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希・盾宮優斗の答え

『（1） $X = / 6$

（2）？』

教師のコメント

そうですね。角度を『。』ではなく『』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) X = よりやう』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは正解に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) よりやう?』

教師のコメント

先生はこれまで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

「言い訳はよく考えてから言いましょう」

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ、アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本雄一サマサマだな！』

『そういうば盾宮も活躍してたよな』

『そういうばあの畠集団を得意な数学で倒していたもんな……』

『坂本と盾宮万歳！』

『姫路さん愛しています！』

・・・そんなに喜ばれると照れますね・・・しかしまた姫路さんにラブコールを送っている人がいませんでしたか？懲りない人ですね。

・・・あれは・・・明久君？まだ雄一君の命を狙っていたんですね？仕方がないですね・・・

「死ねえ！雄一！」

ガツ

「ストップですよ、明久君」

「ゆ、優斗！？離せつ！僕の人生を狂わせた奴には地獄を見せないといけないんだっ！」

「先ほど島田さんに罪を押し付けていた方が何をいつているんですか？」

「・・・それはそれ、これはこれだあー」

「小学生レベルの言訳をしないでください。・・・よつ。」

「べあつー。」

手首をひねつて包丁を落とされました。危険物ですからね。怖い怖い。

「・・・優斗、皿で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「その皿の中の一人を殺そうとしていませんでしたか?」

「・・・僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛い。」

「今、何じよつとしてやがった」

おや、雄二君の参戦のようですね。

「も、もちろん」

「雄二君の殺害ですよね?」

「わつわつ、それ手首がもげるほどに痛い。」

「おーい。誰かペンチを持ってくれー。」

「では、藁人形と五寸釘も

」

「す、ストップ！僕が悪かつた！」

「チツ」

ふむ・・・せつかくこの間読んだ本に書かれていたことを試そうかと思つたのですが・・・えーと確か・・・。

「・・・生爪・・・」

「・・・丑の刻参り・・・」

そうそう確かにそんな名前 つて明久君？何故がたがたと震えているんですか？

「まさか姫路さんがFクラスだなんて・・・信じじられん」

「あ、あの、たつきはすいません・・・」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ・・・ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね？雄一？」

「いや、その必要はない」

「え？ なんで？」

「Dクラスは目的ではないからですよ」

「優斗、それはどうこいつと? 折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れましたか明久君? 目標はAクラスですよ?」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスをにしなこの。おかしいじゃないか」

「……はあ。今日の電話したでしょ? もう忘れたのですか?」

「まったくだ。だからお前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんで愛称をつけられるんだ」

「なつ! そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ。」

「半端にリアル……といふことは言われたのは近所の……小学生とかですか?」

「……人違いです

「……あれ? 本当だったなんですか?」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……?」

まさか本当に言われているとほ……

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもつはな  
い」

「それは俺たちにはありがたいが……それでいいのか？」

「もちろん、条件がある……俺が指示を出したらBクラスの室外機を動かなくしてもらいたい。それだけだ。」

「それはこいつらとしては願つてもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦での作戦に必要なんでな」

ふむ……室外機を壊す……Bクラスのパソコンが目的……熱や温度を上げて召喚獣の操作をさせにくくする……ダメです、窓を開ければたいした問題にはならない……窓を開けさせる……しかしなんの意味が

「優斗？ 大丈夫？」

「 って明久君？ どうしたんですか？」

「いや、優斗こそこそに突つ立つてたのさ。もう戻つ出してるよ。」

「ああ、すいません。考え方をしていました」

「あ、そつなんだ。じゃあしちゃった？」

「いえ、あのままだと学校が施錠されるまでああしていったと思いますから。ありがとうございます」

「施錠されるまでつて……じ、じゃあ雄一を待たせているし先行

くね

「ほー。では、また明日」

「じゃあね～

「・・・ふつ、では僕も帰りますか」

えっと鞄を・・・おや?あれば・・・

「姫路さん?」

「た、盾宮君ーー?」

?..どうしたんでしょうか。あんなに慌てて・・・ん?あれば・・・  
便箋と封筒・・・おそらくラブレター用・・・といつ」とは。

「すこません。吉井君宛のラブレター製作中に

「!..な、なんでわかつたんですか!-?」

「吉井君相手だと、ちよつと態度が違うんですよ。それでなんとな  
く・・・」

あからざまに違いましたが。

「ううう……坂本君も知つてましたし……私つてそんなにわかりやすいんでしょうか……」

ええ、かなり。

「そういうえば……明久君とは会いませんでしたか？先ほど教室に向かつたと思いますが……」

「えつと……さつき席を外してて……」

「すれ違いになつた、と」

「あ、あのう……」の事は

「わかつていますよ。この事は明久君には黙つていますので」

「は、はい。よろしくお願ひしますね」

「ではこれで。また明日。」

「はい。畠田」

ん？あれば……。

「明久君？どうして？」「……？」

「あ、優斗。あ～実は教科書忘れちゃって」

「そりですか。ではまた」

「うん。じゃあね～」

ふう、では帰り あれ？姫路さんの事言つ忘れてませんか？・・・  
・まあ良いでしちう（放任主義）

さて、突然ですがここで僕の家について説明しておきます。

僕の家族は、母、父、一応兄、そして僕の四人家族です。

母は“イージスグループ”（超巨大企業）の創始者の娘で代表取締役。戦国時代から名を残し続ける、盾宮家の跡取り娘。その影響で、僕は昔から弓術、剣術、薙刀、乗馬等々・・・をやらされてきました。（そのお陰で弓が上手いのですが）

父は大学の教授。かの有名なハーバードに在籍しています。父の専門が数学だったお陰で、数学が得意になりました・・・が遺伝なのか、父が苦手な地理や歴史が苦手になりました。（あと英語も無理です）

あと兄は・・・割愛します。

さて、何が言いたいかと言つと。

母が大きな会社の重役でお金が貯まる

父が計算が得意で昔から家のお金をきちんと管理しているため、お金が貯まる。

となると、必然的に・・・。

「ただいま」

『『『お帰りなさいませ、優斗様』』』（総勢50名の大合唱）

・・・になります。

「料理に薬品は使いません!」

・・・はあ・・・また遅刻、ギリギリですよ・・・それもこれも母さんが明日の学校の事など考えずに特訓なんかするから・・・はあ・・まあ、挨拶はきちんとしたいけませんからね。元気を出して。

「おはよ〜い〜」

「

「うわあああ！」

「ゴスツ！」

「グハアツ！み、鳩尾に誰かの頭が・・・！」

「ん？あれ？何かにぶつかったような・・・つて優斗！？大丈夫！？」

「あ、明久く・・・ん（ガクツ）」

「優斗！？大丈夫！？優斗！優斗！？」

「あ・・・いし・・・き・・・が・・・

「んで、そのまま保健室に運ばれて今に至ると」

「ええ・・・まあ、昨日の戦争のダメージは皆無ですし、次の戦争には影響が無いと思いますよ」

「ううう・・・ごめん、優斗」

先ほどの明久くんの体当たり（本人にはその気はなく、船越先生から逃げるために勢い良く扉を開けて逃げたところ、ちょうど僕が来て激突した）によって気絶した僕は保健室に運ばれ、少し前に目覚めて教室に帰つて来たら、すでに四教科目のテストが終了していた。といつ訳です。

「よし、昼飯食いに行こう！」

「いいですね、昔から『腹が減つては戦はできぬ』なんて言われてましたしね」

「今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「・・・食べ過ぎても戦はできませんよ」

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「人数が多いほうが美味しく食べられますしね」

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりをいただこうかな」

「明久くん、びびりぬいとも塩水ですよ」

・・・あれ? 何かを忘れてこるような・・・。

「あ、あの。皆さん・・・」

「ん? 姫路さん・・・あ。

「もしかして昨日のお弁当・・・ですか?」

「は、はいっ。迷惑じやなかつたらびいどり」

「迷惑なもんか! ね、雄一! 優斗!」

「ああ、やうだな。ありがたい」

「ええ、ありがとびいどりこま」

『諸君。いじめはびいだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより――――異端審問会を開催する。』

「す？」

いきなりなんなんですか？いつの間にか覆面まで被つて。

『罪状を読み上げたまえ』

『はつ。須川会長。えー、被告、吉井明久、坂本雄一、ムツツリー一、盾宮優斗は我が文月学園第一学年Fクラスの生徒であり、この者達は我らが教理に反した疑いがある。この者達の罪状は賄賂の受け取り及び背信行為である。先ほど同クラスの姫路瑞希からお弁と賄賂を受け取るうとしたところを現在包囲中であります。賄賂の中身を確認した後、彼らに對して然るべき対応を――』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『手作りお弁当を食べるなんて羨ましいであります！』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

「・・・秀吉君が対象外なのはおいといて、なぜそんなことで裁かれねばならないのですか？そもそも教理に反したって、その教団に入つていなければ対象外なのでは？」

「甘いなーこの学校にいる時点で、我らFFF團に加盟していると同じ事なのだよー」

「どんな悪徳教団ですか・・・まつたく」

「もういい、黙らせる。」

「キシャアアアア！」

クラスメイトの・・・確かに田中君でしたつけ・・・がハサミを持つて襲いかかってくる・・・やれやれ。

「武器を持つたくらいで・・・いい気にならなこでへだたこー。」

「ゴスッ（回し蹴りが顔面に入った音）

「グボアアア！」

『 』『 』『 』『 』『 』

「やれやれ・・・」の程度ですか？」

「くそつ！かかれ！」

『 』『 』『 』『 』『 』

「はあ・・・学習しませんね・・・皆さん先に廊上ででも行つておいてください」

「おー、さすがに」の数は・・・。

「優斗！危な

」

ドギヤ！バキッ！「ガツ！ボスつ！グギヤ！

(上から順に、蹴り上げ、肘鉄槌、関節外し、崩突き、掌手)

『『『ギヤアアアー！』』』

「ふう・・・ん？雄一君、明久君、何か言いましたか？」

「・・・何でもない」

？？？何か言つたのは確かにはずですが・・・まあいいでしょう。

「まあ、ここには任せてくれ」

「・・・わかった。まあ皆、早く行こうか」

「・・・そうだな。じゃあ飲み物でも買いに行くか」

「あ、おいー待て！」

「おつと、ここは通しませんよ」

多人数は久しぶりですね。つい先日やったSP500人組み手よりもシですが。ああ・・・小六のころのSP10人組み手が懐かしい・・。

『『『キシャアアアー！！！』』』

・・・ま、早く倒して合流しますか。

ふつ、遅れてしましました。やはり、クラスメイトだからって手加減したのが不味かったのでしょうか……。

「わい、屋上につきましたね」

お弁当がどれ程残っているのか……気になりますね。

「皆さん、遅れてしましました」

「あっ！優斗！」

「よ……ひ……ひ……と……」

・・・雄二君？顔色が悪いですよ？何があつたのですか？

「お弁当は……つて空？」

「ああ、」めん優斗。実は雄二が食べちゃつて

「ああ、食べ過ぎですか。いけませんね、顔色が悪くなるまで食べ  
るなんて」

しかし・・・食べ物が無いといつのは・・・辛いですね。

「まあ、食べてしまったものは仕方がないですし。売店で何か買つてきまよ」

「それが良いと思つ

「あ、あの。デザートで良ければありますよ。」

「「「「」」」

「あつがとうござります。監督ともどひですか？」

「い、いやつ。僕らはお腹いつぱいで…」

「そ、やつぢやー全部食べて良いぞー！」

「・・・・・（口ク口ク口ク）」

「・・・・むうなにも入らねえ・・・」

皆さんそんなに食べたんですか？まあ僕の分まで食べていれば当然かもしれませんね。しかしやけに焦つてますね。

「じゅあお葉に甘えて。いただきまーーー」

「あつーじめんなさいつ。スプーンを教室に忘れぢやいましたつ。今から取つてきますねつー」

「あつ。大丈夫ですよつこませんね・・・」

ふむ。先ほどの乱闘でお腹が空きましたね・・・。

「・・・姫路さんには悪いですが先に頂きますかね」

容器を傾けて一気にかきこむ。

「ふむ、なかなか美味しい ゴブファツ！」

な、何ですか・・・この・・・料理は・・・。

「・・・雄二」

「・・・なんだ？」

「・・・さつきは無理矢理食べさせて『メン』

「・・・わかつてもらえたならいい」

「・・・大丈夫かの、優斗」

薄れ行く意識の中でもそんな声を聞いた気がします。

・・・今日は厄日ですか。

「腕輪・・・やつこえはそんな物も・・・」（前書き）

## バカテスト〔第5問〕

物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『戦者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです

盾富優斗の答え

『キン〇ダム〇ーツの主題歌』

先生のコメント

君だけはまともだと思つていきました

「腕輪……やつこえばそんな物も……」

「さて皆、総合科目[テスト]」苦労だった

教壇の雄一君が士気上昇のための演説をしている。まあ、士気は十分高いのですが念のために。

・・・昨日はあの後どうなったのかですか？・・・僕はある姫路さんの料理を食べた後、気絶してしまい、目が覚めたのは放課後でした・・・つまり僕は、今日やった苦手教科の得点しか回復していい訳です。

・・・しかも帰りが遅くなつたとかで昨日の訓練はいつもより厳しいものになつてしましました・・・本当に昨日は厄日だつたみたいですね・・・。

キーンゴーンカーンゴーン

・・・おや、昼休みが終わつたみたいですね。さて今から戦争です。  
「よし、行つてこい！田指すはシステムディスクだ！」

『サーヴィス・サー！』

今回の指令はBクラスを教室に押し込む事。よつて廊下の初戦は確実に取らねばなりません。

「いたぞBクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

数は10人・・・様子見といったところですね。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗  
総合 1943点 VS 764点』

点数差が酷いですね・・・。

『Bクラス 金田一祐子 VS Fクラス 武藤啓太  
数学 159点 VS 69点』

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博  
物理 152 VS 77点』

単教科ならまだいきますね。数学に教科を絞りますか。

「さて、僕も戦闘を――」

「来たぞー!』『使いだ!』

「――せめて名前で呼んでくれませんか?」

しかし多少ながらも有名になつてゐるようですね。

「優斗、いきなりだけど・・・」

「わかつています。が、その前に「

「ん?どうかした?」

「いえ、ちょっとだけに……では無く陽動をやってくれませんか？」

「今、確實に生け贅つて言おうとしてたよね……？」

「で？ やりますか？」

「嫌だよ！ 確実に崖っぷちに立たされるじゃないか！」

「失礼な。僕は友人を崖っぷちになんて立たせませんよ」

「え？ そりなの？」

「ええ、もちろんです。僕がやるならホオジロザメの群れのど真ん中に縄で逆さ吊りにするだけですよ」

「悪化してるとか……それ確實に悪化してるとか……」

「安心して下さい。縄は人0・9人分を吊るしても切れないものを使用しますから」

「0・1人分足りないんだけど……？」

「お、遅れ、まし、た……。」「め、んな、さい……。」

「ああ、姫路さん。大丈夫ですよ、明久君で時間潰ししていましたし」

「せめて『明久君と』って言つてくれないかな！？」

「クソツ、姫路瑞希まで来たぞ！」

やはり情報が伝わってます、警戒しているようですね。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行つて、来ます」

「では僕も行きますかね」

さて、補充しきれていない僕がどこまで戦えるか……。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

ああ、数学は長谷川先生でしたか。覚えておきましょ。

「律子、私も手伝つ！」

やはり姫路さんは潰しておきたい存在のようですね、なじみ。

「姫路さん僕も参加します」

「あ、はい。お願ひします」

『試験召喚！』

幾何学的な魔法陣と召喚獣が登場する。それにしても似ていますね、

召喚獣と僕らの顔。

「あれ？姫路さんと優斗の召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

「？結構解けると、アクセサリーをしているの？」

「アクセサリー・・・そういうえば腕輪システムなんて物がありましたつけ。」

「そ、それって！？」

「私たちで勝てるわけないじゃない！」

400点以上の得点を取ると特殊能力のついた腕輪がもらえるといつたものでしたね。

「じゃ、こきますね」

「ちょっと待つてよ！？」

腕輪の能力は個々によつて異なるそいつですが。

「律子ーとにかく避けないとー」

さて、姫路さんの能力は？

キュボツ！

「きやあああーつ！」

「り、律子！」

なるほど、『熱線』ですか。

『Fクラス 姫路瑞希 & 盾宮優斗 VS Bクラス 岩下律子  
& 菊入真由美  
数学 412点 & 614点 VS 189点 & 151点』

さすがですね、では僕も。

「着地姿勢を考えて回避しないと、矢のいい的ですよ」

「え？ へ？」

ヒュン！ ドスッ！

「申し訳ありません。一応勝負、ですのでの」

僕の召喚獣が放った矢は、相手の召喚獣の眉間に突き刺さっています。昨日戦いで理解したのですが、召喚獣も人間と同じで頭、喉、心臓をやられると死亡するようです。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なつ！ そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希に弓使い、噂以上に危険な相手だ！」

相手側の士気が下がり始めましたね、圧倒的な力ほど心を折る武器

はありませんからね……といつも僕の名前は弓使いで確定なんですか？

「み、皆さん、頑張ってくださいー」

「やつたるでえーつー！」

「姫路さんサイコーシー！」

「おやおや、すごい人気ですね。士気がつなぎ盛りですよ。

・・・こつなると僕の腕輪の能力も知りたくなりますね、では。

「腕輪発動！」

ヒュン！ ブスツ！

「な、なんだ！？」

「矢が飛んで来たぞ？」

「なんで俺があ！」

ふむ、矢を虚空から呼び出す能力……いや、あの矢の軌道と発射位置は……なるほど、そういう能力ですか。しかし確証が——

「姫路さん、優斗、とりあえず下がって」

「あ、はい」

「……了解」

仕方がありません、次の戦闘時に確かめますかね。

「・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのづ」

「ですが確実に点数には響いてきますね・・・」

僕らは一度、教室に戻つて来ています。なんでも、Bクラス代表の根本という人は卑怯の代名詞のような人物という事らしく、様子を見に教室に戻つて来ている。と、いうわけです。

まあ、予想は大当たりし。僕らを迎えたのは穴だらけの卓袱台、へし折られたシャーペンや消しゴム等でした。

「勝つためとはいえ、ずいぶんと器の小さい人物ですね、その根本とかいう人は」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄一がそう言つならいいけど」

・・・確かに修復のできる範囲内の被害ですが・・・相手側もそれくらいはわかるでしょう。となると目的は意識をそらす事や時間を使わせる事・・・田代は別にありますね。

「それはそうと、どうして雄一は教室がこんなになつてゐるのを気づかなかつたの?」

「協定を結びたいとこに申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定? 内容は?」

「ああ。四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試合戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「それ、承諾したの?」

「そういだ

「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利なんじゃないの?」

「姫路以外は、な」

「つまり、体力の少ない姫路さんを万全の状態にするために休息の時間を作る・・・そういう見方でいいんですね?」

「そのとおりだ」

・・・しかし・・・相手もそれくらいは承知しているはず・・・相手側のメリットは明日には回復している文具の破壊工作のみ・・・ほかに目的があるのでしょうか？

「明久、優斗。とりあえずわしらもせんせんに戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

「あ、僕は文具のほうを手伝います、色々考えたいこともあります」「ん。じゃあ、雄二、優斗、あとよろしく」

「お気をつけで」

さて、僕らはゆっくり休んでいましょうか。変なこともおきないでしうしね。

数分後、誰かに散々殴られ、顔を地面に叩きつけられた明久君が運ばれてきました。

「いったい・・・何が・・・」

「演技がお上手ですね」

「ううませじーへ。」

「あ、気が付きましたか?」

「やつと起きましたか、明久君」

「心配しましたよ? 吉井君ひじば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたよつたな怪我をして倒れているんですか」

「ひ

「運んできてくれた畠さんには感謝する事ですね」

「いらっしゃる『戦争』じやからとこって、本当に怪我をする必要はないんじやぞ?」

まつたくです・・・まあ、やつた人物は想像がつきますが。

「ちよつとこひあつてね。それで試合戦争はどうなつたの?」

「今は協定どおり休戦中じや。続きは明日になる」

「戦況は?」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、いらっしゃるの被害も少なくないがな」

「ハピニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

・・・しかしまあ相手の作戦は残つてゐる。動きがあるとしたら僕らが学校にいるうちに何かあるはずです。

「・・・・・（シナントン）」

「あ、ムツツリーか。何か変わつたことはあつたか？」

おや、諜報担当のムツツリー君ですね。Bクラスが動いたのでしょうか。

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだと？」

「・・・・・（「クリ）」

Cクラスが動く・・・目的がAクラスなんて事はないでしょう。つまり――

「漁夫の利を狙つつもりか。いやらしい連中だな」

今の戦争で疲弊している相手を叩く。誰でも当たり前に思い付く作戦ですね。

「雄」「どうするの？」

「んー、やうだなー」

「Cクラスと協定でも結ぶ――」

「Cクラスと協定でも結ぶ――」

「ちょっと待ってください――」

「つと。どうしたんだ優斗？」

「下手に動かない方がいいでしょう。このCクラスの進軍情報こそ、Bクラスの作戦の可能性があります」

「なに――？」

「ちよつ、それ本当？」

「ええ、おやじへですか」

「じゃが、なぜCクラスの進軍がBクラスに良い影響をあたえるのじゃ？」

「Cクラスが戦争終了後の僕らを狙って進軍するところ情報が入ったらどうしますか？」

「やはり。雄一のとった作戦通り、協定を結ぶと思つのじゃが

「Bクラスとの『試召戦争に関わる一切の行為禁止』があつてもですか？」

「ちよつか――やつらの目的は協定のために来た俺を含む少数部隊！」

「ええ。しかもCクラスと協定を結びに来た“Bクラスとの協定破り”を倒すという大義名分まで持つてね」

「くそっ、めんどくさい策を使いやがる」

「あのつ、ひとついいですか?」

「姫路さん?何ですか?」

「その作戦つて、BクラスとCクラスが協力しないと成立しませんよね?」

「ええ、彼らの目的がそれならば、何らかのつながりがあると考えるべきでしょう」

「じゃあ、協力していない可能性も・・・」

「ええ、しかし、協力の有無にかかわらず。Bクラスに有利な状況を作り出してしまっては、協定は結ばないほうがいいかと」

「確かにな。ムツツリーニ、CクラスとBクラスのつながりを調べてくれ」

「・・・・・了解」

「・・・しかし、同盟が結べない以上、Cクラスが漁夫の利を狙つてくるのは当然・・・それをどうするかを考えないといけませんしね・・・」

「心配するな。向こうがそう来るなら、いつにだつて考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝実行する。田たは田を、だ

「昨日言つていた作戦を実行する」

翌朝、午前八時三十分です。Bクラスとの戦闘は九時に行つ予定なので、おそらくCクラスへの作戦でしょう。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Cクラスへの作戦ではないでしょ？？」

「あ、なるほど。それで何をするの？」

「秀吉にコトウイツを着てもうつ」

といつて取り出したのは女子の制服・・・つて。

「雄一君・・・そんな趣味が・・・」

「ちよ、おじまで。これは作戦だからなー!？」

「あ、いえ、いいんですよ。趣味は人それぞれですし……」

「盛大に勘違ひしているじゃねえか！」

「まあまで、このままでは話が進まんぞい」

「それもわうですね。面白かったのでもあ良じとしましょ、う」

「てめえ……こいつかぶつ飛ばす……！」

「まあまあ、それで？ワシが女装してビウするぞじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装つてもいい」

木下優子……皿山紹介のときによがられていた名前の一つだつだような気がしますが……わかることといえば、秀吉君にそつくりである可能性、Aクラスであることですかね……しかし、演技がうまくなくてはばれてしまうのでは……そういうえば演劇部に所属していると言つていきましたね、うまいのでしょうか？

「んじゃAクラスに行くぞ」

「ん、ああ、はい」

おや、また考えすぎていたようですね……しかし、顔が赤い人が多いような、どうしたのでしょうか？

「セヒ、ソヒからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのう・・・」

たしかに、お姉さんの評判を著しく下げてしまいますし・・・

「セヒを何とか頼む」

「むう・・・仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかく相手を挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

「はあ・・・あまり期待はせんでくれよ・・・」

本当に気が重しがちですね、演技に影響しなければ良いのですが・・・

ガラガラガラ

秀吉君が教室に入りますね。セヒ、いったいどのようないふうなことを喋るつもりなのでしょうか・・・

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

・・・(絶句)

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね・・・」

「と、とにかく、開口一番に豚どもとは・・・」

いつたいどんな性格なのでしょうか・・・秀吉の姉さん・・・

『な、何よアンタ!』

この声は・・・おそれらくCクラスの代表でしょううね。

『話しかけないで!豚臭いわ!』

いや、自分から来たのでしょうか?

『アンタ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数良いからつていい気になってるんじゃないわよ!何の用よ!』

うまく引っ掛かってくれていますね。しかし声が完璧に変わっていますね。すごい才能なのでは・・・

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!貴方達なんて豚小屋で充分だわ!』

『なつ!』ことに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?

貴方のなかではFクラス=豚小屋という方程式が成り立っているのですか?

『手が穢れてしまつから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送つてあげようかと思つ』

気持ち良い位の罵倒ですね。

『ちよつと試合戦争の準備もしているよつだし、覚悟しておきなさい。近づいて私達が薄汚い貴方達を始末してあげるからー。』

やつぱりひびきで来る秀吉君。

「これで良かつたかの?」

ストレスを発散したような秀吉君。まああんな罵倒を気持ちよく言えたのですし、無理もありません。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

そのようです。現に『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ!』といつ声が聞こえてきます。作戦は大成功ですね。

・・・といつで・・・

「秀吉君?」

「ん? 何じゃ? 優斗?」

「秀吉君のお姉さんはあんな性格なのですか?」

「つむ、学校では猫を被つてゐるがの」

「先ほどの会話、バレたら不味いのですよ。」  
「うか・・・では。」

「先ほどの会話、バレたら不味いのです?」

「つむ、じやがバレなければ良このじや」

「・・・彼らはAクラスに何が何ですか?」

「・・・あ

・・・今気がついたよりですね・・・

「戦争には犠牲がつねものである（今回も里久君）」（前書き）

## バカテスト 「第五問」

### 科学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希・盾宮優斗の答え

『C<sub>6</sub>H<sub>6</sub>』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめてはいませんか。

吉井明久の答え

『B—E—N—N—E—N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に来るようだ。

「戦争には犠牲がつゝものである（今回も明久君）」

「なるべく固まって隙を消すよつこじてください！後、戦線を拡大させないようこー！」

現在、9時をすぎてBクラス戦が再開されてから少しつたくらいです。

現在の指令は『敵を教室内に閉じ込める』というもの。これはこの戦争で勝つための作戦の一部です・・・しかしこんな作戦をよく思いつきましたね、感服します。

そして僕は左側出入口の司令官として先頭区域より少し後ろで指示を出しています・・・戦闘に参加はしたいのですが、あいにく混戦状態。僕の召喚獣は使い物にならないので、司令官として活躍しているわけです。

「左側出入口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

む・・・押されてきましたね、しかし古典は苦手教科・・・僕が援護できればいいのですが・・・

「姫路さんー援護をお願いします！」

姫路さんは今回の作戦での鍵を握る重要人物なので、頼りすぎるわけにはいかないのですが・・・しかし、変ですね。姫路さんは先ほどからどうしたのでしょうか？召喚獣もだしていませんし・・・何か

あつたのでしょうか？

「だああつ！」

つて、明久君？どうして君が来るのですか？

人ごみを搔き分け、立会人の古典の先生に何かを呴く。そのとたん、頭を押されてキヨロキヨロと周りを見る先生・・・カツラですね。

「少々席を外します！」

どこかへ行く先生・・・まあ、あの反応でカツラだとこいつとはここにいる全員に知られてしましましたがね。

「くそつ、押されてきたぞ！」

「援護はまだ来ないのか！？」

おや、こちらはまだピンチのようです。何か使えるものは・・・  
そういうえば、先ほどムツツリー二君から情報をもらつてましたね・・・  
・あれを使えば。

「え～皆さん！伝達情報です！」

「なんだ！新しい作戦か！？」

「Bクラスの代表がCクラスの代表と付き合つてているという情報が入つてきました」

これは昨日、雄二君がムツツリー二君に頼んでいたBクラスとCク

ラスのつながりです。もつとも、今は関係ないよつて思えますが。いまこの情報を流す意味は・・・

「諸君、Bクラスの根本恭一が我らが血の盟約に反したよつだ

『拷問！抹殺！』

「よろしご、ならば突撃だ！」

『サーヴィスサー！』

彼らを動かす為です。

『な、なんだこいつらー？』

『いつの間に覆面をー！』

『来るなー！いつに来るなー！』

効果観面てきあんですね。

・・・おや？明久君がいませんね、どうしたのでしょうか？

『優斗』

「あれ？雄一君？来るのが早くありませんか？」

「ちょっと予定がくるつてな

「予定？たしか次は・・・姫路をとこみる近衛部隊の陽動ですね？」

「そうだ、それを明久がやる

「……できるのですか？高得点の姫路さんならともかく、明久君では……」

「まあ普通はそう思うが……ま、明久にも秀でている部分があるといふことだ」

「ふむ……」

「明久君の秀でているところを利用した作戦……ダメです、わかりません。」

「一体なんなんですか？その作戦は？」

「安心しな、すぐにわかる」

「ふむ……まあ、わかるまで待ちますか。」

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

「おや……」の声は……

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

Bクラス代表……彼が根本ですか。

「……なんでしょう？Bクラスの壁から何かを叩くような音が聞こえるのですが……」

「はあ？ ギブアップするのはそつちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そりだし、弓使ひは味方が邪魔で参戦できてないじゃねえか！」

「ああ、違いますよBクラスの代表さん。僕が出ないのは、単にあなた方に射る矢がもつたいたいからですよ」

「けつ！ 口だけは達者だな。弓使いさんよあ」

「おや? 知らないのですか? 僕の名前は盾宮優斗ですよ? 弓使いではありません。もしかしてそんな事も調べていませんか?」

・・・壁の音が酷くなつてきましたね。ヒビが入るような音も聞こえますし・・・待てよ、そういうえば明久君・・・陽動・・・観察処分者・・・まさか。

「……やつからドンドンとい、壁がうねせえな。何かやつてこるのか?」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか?」

「あり得ますね、幸薄そうな顔をしていますし」

「けつ。言つてろ。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せー！」

「・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

いえ、ただ純粋に貴方から部隊を引き離すため、ですよ。

「あとは任せたぞ、明久」

おそれりぐ、明久君がやる」とは――

「だああ――しゃあ――つ――」

Bクラスの壁の破壊！

ドゴオツ

豪快な音をたて、Bクラスの壁が砕けた。

さすが召喚獣、コンクリートくらいは破壊しますか。

「くたばれ、根本恭一――！」

明久君の部隊が根本に勝負を挑む。

「遠藤先生！Fクラス島田が――」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

「くつ！近衛部隊か！」

教室内の近衛部隊が行く手をふさぐ。

・・・さて、僕も準備しますか。

ここに、先ほど聞いた教科の説明をしましょう。

各教科には担当教師がいて、その先生によつてテスト結果にも特徴が現れます。

数学の木内先生は採点が早い。世界史の田中先生は点数のつけ方が甘い。英語の遠藤先生は寛容で、多少の事は見逃してくれます。

何故こんな話をするかと言つと、今回の作戦にその先生の特性が組み込まれてゐるからです。

科目は保健体育、特性は体育教師であるが為の一――

ダン、ダンッ！

ロープを使用し、窓から入つてこられるほどの行動力です。

まあ、窓が開いていなければ入れなかつたのですが、出入り口に人の山。空調が止められ停止したエアコン。そのせいで教室内にはかなりの熱気がこもります。よつて窓を開けざるを得ない。という訳です

「・・・Fクラス、土屋康太」

「ムツツリーイーッ！」

「あ、キサマ……くつー」

出入り口に向かおうとする根本、しかし。

「残念ですが行き止まりですよ。代表さん

「ゆ、弓使い！？」

「注意が削がれていれば、召喚獣で人を飛び越えるくらい簡単ですよ……さて」

「……試獣召喚」  
サモン

「王手、です」

『Fクラス 土屋康太 & 盾宮優斗 VS Bクラス 根本恭一  
保健体育 441点 & 168点 VS 203点』

こいつに向かってきた根本の召喚獣の足を射つて、態勢を崩したところをムツツリー「君の召喚獣が止めをさしました。

わ、Bクラス戦終結ですね。

「たぶんトライアルになるでしょ?」

「まつたく、いつなむ」とへりこわかつていていたでしょ」「え？」

「うう・・・痛いよつ、痛いよつ・・・」

武器あり+一部しかファイードバツクしないとはいえ、コンクリートの壁を破壊したんですね。痛くて当然ですね。

「痛み止めをあらかじめ飲んでおくくらいの予防策はとつておいて  
もいいでしょうに・・・まあ、明久君ですし、仕方がありませんね」

「……遠回しに馬鹿つて言つてない？」

学校の壁を破壊した事により、明久君は退学や留年になつてもおかしくなかつたのですが、初犯ということで見逃してもらつたそうです。『ま、それが明久の強みだからな』

馬鹿が強み・・・まあ・・・明久君らしいといえばらしいですが。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といふか。な、負け組代表？」

卷之三

ゆかに座り込み、おとなしくなつて『いる根本君。さすがにかわいそ  
うになつてきましたかね。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプ

レゼントあると」「だが、特別に免除してやらんでもない」「やつぱぱり来ますか。周囲はざわめいていますが。

「落ち着け、皆。前にもいつたが、俺たちの田舎はAクラスだ。こじが」「ゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「」「はあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやうと思つ」

「・・・条件はなんだ」

受けるしかないですよね。もし受けなければ廃屋と卓袱台が待つているんですから。

「条件?それはお前だよ、負け組代表さ」

「俺、だと?」

「ああ。お前には散々好き放題やつてもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな」

凄い言い様ですね。さすがにフォローが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・きませんね。味方にも嫌われているんですね

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

お昼に言つていたあの取引ですね。

「Aクラスに行って、試合戦争の準備ができるいると宣言している。  
そうすれば設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか?」

「はい、それだけで――」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そび」

「はい? 何で女子の制服を? まさか雄一君、本当にそんな趣味を・・・

「ば、馬鹿な」と言つた。「の俺がそんなことを・・・」

「当然嫌ですよね。Bクラスの皆さんも何か言って――」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう!』

『任せて! 必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるならやらない手はないな!』

味方=0

むじり清々しいほどに哀れですね。  
すがすが

「んじゃ、決定だな」

「へつ…よ、寄るな…変態ぐふうつ…」

「とつあえず黙らせました」

「お、おつ。ありがと」

本当に人望の無い人ですね。一瞬で見限られました。

明久君が着替えさせにいきましたが…。今のうちに。

「…・雄一君？」

「ん、優斗か。どうした？」

「なぜ女子の制服を？本来は宣戦布告だけのはずでしたのに…」

「ああ。それなら明久が根本の制服が欲しいと言つてきてな。まつたく、何がしたいやら」

なるほど。とこ「とほ。

「雄一君に続き、明久君までそんな道に…。残念です」

「ちょっとまで…朝のことまだ引きずつてんのか！？」

「いえ、大丈夫ですよ。たとえ友人一人が変態でも僕は…」

「ど「」が大丈夫だ！明久はともかく、俺は変態じゃねえ！」

…ん、明久君が制服を持って教室を出ましたね。ちょっと様子

を見ますか。

「あ、ちょっと席を外しますね。それでは」

「あ、ちょっとまでー！」

雄一君は・・・まだ楽しめそうですし、放置しますか。

・・・誤解したまま行くんじゃねえー！・・・と声が聞こえてきましたが、無視しよう。

さて明久君は・・・制服の・・・ポケットから・・・封筒？あれは昨日の・・・なるほど。あれで姫路さんを脅していだと。だから彼女は行動できなかつたんですか。それに明久君の壁破壊の暴挙もうなづけます。

・・・根本でしたつけ？あの人は・・・少しお仕置きが必要みたいですね・・・  
・・・軽く社会的に抹殺しますかね。

プルルル・・・プルルル・・・ガチャ

「あ、もしもし。氷さん？」

「あら？ 質問の僕じゃない。蓮菜元気にしてるー？」

「元気ですよ？ 元気過ぎて困り者ですが・・・」

「あら、それは良かったわ～。で？今日は？」

「ええ、実は撮つてほしい人物がいるのですが・・・」

あ、ここで説明しておきます。氷さんは、母の学友で、カメラマンをやつているのですが・・・女装専門のオカマカメラマンなんですよ・・・（性別は、です）まあ根本君の女装姿を耐えられる人はこの人しかいないでしょうし。

あ、あと蓮菜とは母の名前です。

「・・・ええ、ではよろしくお願ひします」

ピッ

・・・軽く地獄を見てきてくださいね。いろいろと。

一  
夜

「なかなか面白い被写体だったわ～また撮・ら・せ・て・ね

「・・・・・・機会があつたら呼びますよ

かわいそつこ、氷さんに好かれるなんて・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7671m/>

---

バカと弓矢と召喚獣

2010年10月8日13時08分発行